

人々等を集約し、「自分の地域の人」リストの作成をお願いしました。

ネットワークを作っていくために

人と人とのネットワークは一朝一夕にできるものではありません。この「人リスト」作成後は実践に向け、自分の地域での関係づくりのヒントを話しました。

関係づくりでは、何より足を運び、話しを聞くことが大切です、日々の積み重ねが第一歩になります。その際には、企画書の作成や打合せ資料を用い、そして、記録に残し共有することもポイントのひとつです。

また、地域にあるたくさん事例を集めることも大切です。コミュニティビジネスと呼ばれる実践例や、民生委員が行うサロン活動にもそのヒントや協働の可能性があります。福祉教育を狭い意味で捉えずに、「困っていることを解決して幸せになる！」と捉えらると、おのずと実践の場は広がっていくことでしょう。

セミナー全体を通して感じたことは、「知ること、話しをすること、繋がること」でした。

コミュニティスクールでの取組

本セミナーを実施する前に、二か所の学校へ視察に伺いました。三鷹市立第四小学校では、「参画型コミュニティスクール」として地域立学校を目指しています。校内では、三種類のボランティア（コミュニティリーダー、スタディアドバイザー、きらめきボランティア）が活躍しています。子どもたちの「何故？」に地域で実際に活動する方々が答え、授業には担任とボランティアで先生役が七人八人という日もあり、また、放課後や土日には、英会話や書道などたくさんメニューが揃っています。学校と家庭と地域の「協力」から、子どもと教師、保護者、そして地域の人たちの「参画・協働」へ、が第四小学校のキーワードです。

もうひとつ、横浜市教育委員会より指定を受け、県内唯一の「コミュニティスクール」を展開している横浜市立東山田中学校では、校内にコミュニティハウスを併設し、日々、地域の人々が学校に訪れます。コミュニティハウスは職員室を

出ですぐの所にあり、月ごとに替わる地域の歴史や習慣に関する展示、お父さんが行う絵本の読み聞かせ等が繰り広げられています。

地域における拠点的作用のある「学校」での取組は校外へも拡がり、可能性も感じさせます。また、地域では学校以外にも様々な取組が行われています。地域の商店街(商工会議所)や地域住民の方々の実践に幅と拡がりをもたらしてくれるのではないのでしょうか。

(かながわボランティアセンター)

コミュニティ・スクールのイメージ (文部科学省)

